

## 日本列島の中期／後期旧石器時代移行期に関する再検討

佐藤 宏之\*

RECONSIDERATION OF THE TRANSITION FROM MIDDLE TO  
UPPER PALEOLITHIC IN THE JAPANESE ARCHIPELAGO

Hiroyuki SATO\*

**Abstract**

After the Fujimura's Scandal, a plenty of Japanese Paleolithic researchers estimate to deny the presence of the Middle Paleolithic stage in the Japanese Archipelago. They constrain the certain MP materials to the Musashino X Layer Stage, however, is that correct? Takesa-Nakahara Site in the central Japan had excavated much deliberately after the Fujimura's Scandal and that it belongs to the stage before the Upper Paleolithic is sure, based on the its assemblage made from middle and large flakes. Although, as other site composing of same assemblage is nothing, these many researchers guess to be ranked it to the stage of Early UP.

However, since a new same assemblage discovered from the Shimohondani Site, locality of the water supply pond in the Hiroshima Prefecture in turn, it is high possibility that the single stage composed of these two sites presented in the transition from MP to UP.

はじめに—問題の所在—

## (1) 捏造事件以前と以後

これまで筆者は、日本列島における後期旧石器時代の石器群構造の成立過程を、石器製作技術とその運用システムの構造やその加担者である現生人類の行動論的分析から追求してきた。後期旧石器時代前半期に典型的に見られる様に、当該期の石器製作・運用技術の構造は、台形様石器とその素材を供給する横長・幅広剥片剥離技術を一方の極とし、基部・背部加工尖頭形(石刃)石器とその素材供給技術である石刃・縦長剥片剥離技術を対極とした二極構造から構成され、その遺跡における発現形態(運用)も対極的に異なることを明らかにした。その結果、日本列島には中期旧石器時代が存在したことが理論的に予測され、後者の技術は現生人類の列島への拡散に伴って出現した新出の技術である一方、前者は中期旧石器時代以来の伝統的な技術系統と接続した技術であると解釈した[佐藤 1988, 1990]。同時に南関東立川ローム X 層下部(武蔵野編年 Xb 層段階)の武蔵野台地最古の石器群が、石刃技法出現以前の多様な剥片剥離技術を示すことから、中期／後期旧石器時代移行期を設定し、該期末に相当するとみなした[Anzai and Sato 1990, 佐藤 1992, Nishiaki *et al.* 1995]。

\* 東京大学大学院人文社会系研究科 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo, Tokyo 113-0033, Japan

1) 前期・中期旧石器自体の存在は、捏造事件以前は大多数の研究者の支持を受けていた。なお一部の論文で、捏造資料を使用した場合もあったが、それらは捏造事件を受けて、すでに撤回している。本稿は、それらを除外して議論している。

移行期の設定の提案は、捏造事件（2000年）発覚前には暗黙の支持を受けていたが<sup>1)</sup>、発覚後捏造者の関与した遺跡や遺物は全てが学術的資料として扱えないことが学会の検証結果として宣言されたこと〔日本考古学協会2003〕を受けて、ほとんどの研究者は、捏造者非関与の資料までも含めて、前期・中期旧石器時代の存在そのものを否定したので、当然ながら移行期は存在しないことになる。そして日本列島の旧石器時代は、現生人類が列島に出現した3.8 kaから始まるとみなした。

これらの研究者の多くは、論拠を明示しないで否定するか、あるいは明らかに石刃技法出現以前と目される資料については、全て後期旧石器時代初頭の立川ロームX層下部段階に集約するという「操作」によって説明した。そしてX層下部に押し込められないものは、全て自然為の所産と見做している〔諏訪間2006〕。

## (2) 捏造事件を受けた再検討

捏造事件の発覚を受けて、筆者は捏造者が関与しなかった「前・中期旧石器時代」の遺跡や遺物を再検討した結果、それらの中にはこれまでの主張を支持可能な資料が少なからず残されていることを確認した〔佐藤2001〕。さらに捏造事件以後に調査された長野県竹佐中原遺跡〔大竹2005, 鶴田編2010〕等の資料を加味すれば、列島における中期旧石器時代とその末期である移行期の存在は確実であると考えられる〔佐藤2010〕。

日本列島で人類が発生した可能性が考えられない以上、列島の中期旧石器は、朝鮮半島を経由して大陸から渡来したことは確実である。筆者はこれまで、西アジア・南アジア・東南アジア・ヨーロッパ・シベリア・中国・韓国等の当該期の資料を広く実見してきたが、やはり列島の中期旧石器時代の石器群には、これら大陸の中期旧石器石器群の技術的影響が広く観察できる。と同時に、列島の独自性も浮き彫りにすることができた〔佐藤1992, 2002, 2003, 2008, 2009, Sato 2005, 2016a〕。

ユーラシア大陸の前期旧石器時代後半（45～35 ka）に生じた後期アシュリアン（大陸西側）とそれが及ばず前期アシュリアンの特徴を基本的に継続した東アジア型ハンドアックス石器群（大陸東側）がモヴィウスラインを挟んで対峙するという現象の出現以来、中期旧石器時代にはムステリアン（西側）と非ムステリアン（東アジア型中期旧石器群，東側）が対峙し、現生人類が登場する後期旧石器時代の開始までは、大陸は大きく東西世界に分立したままである。後期旧石器時代になると大陸における地域性がより顕著になるが、東西世界の対立という図式はそのまま今日まで継続している。

現生人類以前のホミニンが本格的な海洋渡航技術を有していた証拠は得られていないので、列島に彼らが足跡を残すためには、大陸と列島の間に一時的に形成された南方陸橋（当時朝鮮半島は拡大した中国大陸の東海岸部であった）を渡ってこなければならなかった。しかしながら、南方陸橋の研究に関しては、海洋地質学や自然地理学等では関心が薄いためかその形成プロセスに関する本格的な検討がなされておらず、依然として古生物学が最も研究が進んでいるようである。それでも諸説が対立しているが、少なくとも最終間氷期直前の130 ka以降に陸橋が形成されたとする見解はない。とすれば列島にホミニンが拡散可能な最後の機会は130 kaとなる。現在列島最古と主張されている島根県砂原遺跡は120 kaであり、これ以降列島には、細々とではあるが中期旧石器時代人が居住を続けていた。120 ka以降現生人類が南方（朝鮮）海峡を渡航する38 kaまでの間は大陸から人類は拡散せず、その直接的な文化的影響は途絶えたはずなので、列島の中期旧石器時代は独自の進化・発展を遂げたと思われる。その文化伝統が、のちの後期旧石器時代初頭において、周辺大陸に類例を見ない局部磨製石斧・陥し穴猟・二極構造等の列島独特の特徴（行動的現代性）を有する初期後期旧石器 EUP 文化を作り上げたと考えて

いる [佐藤 1992, 2016, Sato 2016b]。

## 移行期の位置付け

列島における中期／後期旧石器時代移行期は、50–38 ka の時間幅におさまると考えられる。現在移行期に属する遺跡と考えられるのは、福島県平林遺跡、栃木県星野遺跡探検館地点、群馬県権現山遺跡第2地点、静岡県ヌタブラ遺跡、長野県竹佐中原遺跡 A～C 地点、同石子原遺跡、広島県下本谷遺跡、宮崎県後牟田遺跡第IV文化層、大分県上下田遺跡第2文化層等が挙げられる [佐藤 1992, 2006]<sup>2)</sup>。このうち年代が推定できる遺跡によって暫定的な編年案を公表しているため、再録する (表1)。

中期旧石器時代から後期旧石器時代にかけての遺跡立地を検討すると、対照的な土地利用が判明する。中期旧石器時代および移行期の遺跡は、山間部を中心に斜面地に立地する場合が大部分であるが、一方後期旧石器時代初頭になると台地等の低平な立地に移行する。これは石材利用の方法が異なるためと思われる、移行期以前には石材採取可能地周辺で定着した生活をおくっていたものが、後期になると台地等の狩猟活動に有利な地形に進出し、石材利用は原石やブランクの運搬と遺跡内消費に行動戦略が変更されたためと思われる (佐藤 2006)<sup>3)</sup>。その原因が加担者の種の異なり (旧人 [または原人?] or 新人) に起因するのかどうかは、化石人骨に乏しいため不明であるが、その可能性は今後検討せねばならない。

表1 中期旧石器時代の暫定的編年 (佐藤 2016より)

時代	遺跡名	都道府県	調査法	推定年代 (ka)	年代推定の根拠
前期旧石器時代	加生沢	愛知	採集	200 ka?	段丘対比, 堆積層
	砂原1文	島根	発掘	120	古土壌 (MIS5e)
	砂原2文	島根	発掘	110	SK (110 ka); (MIS5d)
	入口4層	長崎	発掘	100	103 ± 23 ka (IRSL)
中期旧石器時代前半	入口3b層	長崎	発掘	100–85	90 ± 11 ka (IRSL); L.3: Aso-4 (85–90 ka)
	金取4文	岩手	発掘	90–50	Aso-4; 56 ± 21 ka (TL)
	柏山館4a層	岩手	発掘	90–40	Aso-4
	後牟田5文	宮崎	発掘	90–60	Aso-4; A-IW (60 ka); 35.5 ± 4 (TL)
	早水台	大分	発掘	110–80 (50)	Kj-P1 (50 ka); K-Tz (95 ka); Kj-Sm (110 ka)
中期旧石器時代後半	不二山	群馬	採集	55–>50	DKP (55 ka) ~ Ag-UP (unknown)
	桐原	群馬	採集	55–50	Ag-UP ~ Hr-HP (50 ka)
	権現山第1地点	群馬	採集	55–50	Ag-UP ~ Hr-HP
	金取3文	岩手	発掘	50–(40)	46,480 ± 710 Cyr BP (AMS); 31 ± 6 ka, 50 ± 10 ka (TL)
	柏山館2c層下部	岩手	発掘	50–33	involution
	大野最下文	熊本	発掘	70–55	69.3 ± 13.9 (OSL)
中期／後期旧石器時代移行期	星野探検館地点	栃木	採集	>45	Ag-KP (45 ka) 以前
	権現山第2地点	群馬	採集	50–45	Hr-HP ~ Ag-KP
	後牟田4文	宮崎	発掘	45–40	Kr-Iw (40 ka) 直前
	ヌタブラ1文	静岡	発掘	50–40	技術型式学, AT (30 ka) 以前
	竹佐中原 A-C 地点	長野	発掘	50–40	技術型式学, AT (30 ka) 以前
	上下田2文	大分	発掘	50–40	技術型式学
中期旧石器時代	ルベの沢	北海道	発掘	?	技術型式学, 地質堆積

2) 栃木県向山遺跡鹿沼直上層, 和歌山県松瀬遺跡, 大分県岩戸遺跡第3文化層等もその候補に挙げられるが, 年代比定の確実性に乏しい。

3) 立川ローム最下層のXb層段階が移行期末期であることは, このことをよく象徴している。

先述したX層下部段階に移行期等の資料を押し込もうとする考えは、以下のような解釈に基づいている。静岡県スタブラ遺跡や同井出丸山遺跡等において、横長・幅広剥片剥離技術により地元産石材製の中小型剥片石器を製作しているが、井出丸山遺跡第1文化層では黒曜石製の台形様石器を共伴する。その年代値は3.8 kaで後期旧石器時代初頭と一致するので、武蔵野編年Xb層段階に相当するとする〔原田編 2011〕。竹佐中原遺跡A地点の石器も、同種の中型剥片石器とみなす。

しかしながら、列島で最も調査事例が集積されている肝心の武蔵野台地X層下部には、この種の中型剥片石器は検出されていない。石器群の主体は、多様な小型剥片石器からなる。従って、問題となるのは、井出丸山遺跡で見られた中小型剥片石器と台形様石器の共伴が常に存在するかどうかの検討にある。換言すれば、竹佐中原遺跡の組成が単純遺跡として一つの段階をなすのかどうかの検証にある。複数の遺跡で確認できれば、竹佐中原段階（移行期）が単純に存在することを示唆し、井出丸山遺跡段階はその直後に台形様石器と共伴する段階（後期旧石器時代初頭）とみなすことができる。

筆者は長い間この問題を考えてきたが、最近竹佐中原と同種のアセンブリッジを示す広島県下本谷遺跡の資料を確認したので、両遺跡の比較を行いその意義を検討する。

## 下本谷と竹佐中原

下本谷遺跡は、中国山地に形成された盆地にある広島県三次市の丘陵地帯に所在する。1974年から1984年まで三次市教育委員会と広島県教育委員会によって計8回の発掘調査が行われており、県教委調査分はこれまで数冊の概報が刊行されているが、本報告書は未刊行である〔中田編 1980, 桑原編 1981, 樋井編 1983〕。筆者は当該資料を実見し、移行期の資料であるとみなした〔佐藤 1992〕。一方市教委調査分についてはこれまで公表されてこなかったが、2007年に報告書が刊行され〔三枝 2007〕、ようやく内容が公開された。

県教委の調査地点と市の調査地点は隣接した標高220 mを超える丘陵頂部に所在しており、県教委調査地点は「最高所地点」、となりの市教委調査地点は「配水池地点」と称されている〔沖 2015〕。最高所地点の石器群は、一般的剥片剥離によって多様な横長・幅広剥片類を多量に生産しており、その中から一部の剥片を臨機的に用いた削器・錐器や類台形様石器（素刃石器）等を生産している。これらの多くは中小型石器であり、東京都鈴木遺跡御幸地点や武蔵台遺跡Xb層の特徴に共通することから、移行期とみなせる〔佐藤 1992〕。

一方貯水池地点から出土した石器群も、これらの技術的特徴を共有するが、大型剥片類を素材に用いている点で異なりを示す。こうした特徴は、竹佐中原遺跡A地点出土石器群とよく共通しており、大型でありながら不釣り合いなほど微細な調整加工により各種の削器・錐器等を作りだしている。そのため素材剥片の形状は、ほとんど変更されていない。従って、貯水池地点は、竹佐中原遺跡A地点と並行する技術型式学的特徴を有する。

より重要な点は、前述したように、竹佐中原に加えて下本谷貯水池地点の2か所で、同質の石器組成からなる単純遺跡が検出されたことにある。このことは、竹佐中原Aが一つの独立した段階として存在していたことを示しており、他の石器群と混在させてX層下部段階に単純に包摂することは考古学的方法論上困難であることを示している。竹佐中原Aと下本谷貯水池地点は、移行期最末期の武蔵野X層下部段階直前に位置するひとつの段階と考えるのが、考古学的には至当であろう。

\*

大沼克彦さんとは、1980年代頃から懇意にさせていただいている。これまで北海道やアメリカ・シリア・韓国等の調査旅行でごいっしょさせてもらい、ユーフラテス遊牧社会の形成過程といった、いくつかの共同研究プロジェクトにも参加させていただいた。これからますますのご活躍を祈念し、本稿を大沼教授に謹呈したい。

## 参考文献

Anzai, M. and Sato, H.

1990 Transition from Middle to Upper Palaeolithic in Japan. In: *Proceedings of the International Symposium: Chronostratigraphy of Paleolithic of North, Central, East Asia and America (Paleoecological Aspect)*. Soviet Scientific Academy Siberian Branch, Novosibirsk, pp. 97-105.

樋井 勝 (編)

1983 『下本谷遺跡第4次発掘調査概報』広島県教育委員会

原田雄紀 (編)

2011 『井出丸山遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会

桑原隆博 (編)

1981 『下本谷遺跡第2次発掘調査概報』広島県教育委員会

中田 昭 (編)

1980 『下本谷遺跡発掘調査概報』広島県教育委員会

日本考古学協会

2003 『前・中期旧石器問題の検証』

Nishiaki, Y., Suzuki, M. and Sato, H.

1995 Lithic technology of the Japanese Middle Palaeolithic: Levallois in Japan? In: Dibble, H.L. and Bar-Yosef, O. (eds.), *The Definition and Interpretation of Levallois Technology*. Prehistory Press, Madison, Wisconsin, pp. 485-500.

大竹憲昭

2005 『長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化』国土交通省中部地方整備局・長野県埋蔵文化財センター

沖 憲明

2015 「広島県北東部（三次市・庄原市）旧石器時代・縄文時代草創期石器集成」『第32回中・四国旧石器文化談話会「広島県における後期旧石器時代開始期の石器群」発表要旨・資料集』中・四国旧石器文化談話会, 47-73頁

三枝健二

2007 『下本谷遺跡の基礎的研究—三次市西酒屋配水池建設に伴う旧石器時代遺跡の調査から—』三次旧石器文化研究会

佐藤宏之 (Sato, H.)

1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73巻3号, 1-37頁

1990 「後期旧石器時代前半期石器群構造の発生と成立」『法政考古学』15号, 1-42頁

1992 『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房

2001 「日本列島に前期・中期旧石器時代は存在するか—Fujimura's Scandal 以後—」『科学』71巻4・5号, 298-302頁

2002 「後牟田遺跡第Ⅲ文化層の編年的意義と行動論」『後牟田遺跡』後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会, 382-395頁

2003 「中期旧石器時代研究の地平」『博望』4号, 9-22頁

2005 A perspective on the Middle Paleolithic study of the East Asia. In: *Major Issues of the Eurasian Paleolithic*. Institute of Archaeology and Ethnography Press, Novosibirsk, pp. 161-171.

2006 「遺跡立地から見た日本列島の中期／後期旧石器時代の生業の変化」『生業の考古学』同成社, 16-26頁

2008 「東アジアにおける後期旧石器時代の形成」『異貌』26号, 2-15頁

2009 「東アジアにおける前期旧石器時代から後期旧石器時代開始期までの研究の現状と展望—東アジア世界の成立と展開—」『九州旧石器』13号, 1-7頁

- 2010 「日本列島における中期／後期旧石器時代移行期の石器群と竹佐中原遺跡」『長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ』国土交通省中部地方整備局・長野県埋蔵文化財センター, 365-372頁
- 2013 「日本列島の成立と狩猟採集の社会」大津透編『岩波講座 日本歴史 第1巻 原始・古代1』岩波書店, 29-62頁
- 2016 「更新世の日本列島における自然・資源環境の変動と人類行動の応答」『田中良之先生追悼論文集 考古学は科学か』北九州中国書店, 199-214頁
- 2016a Recent research on the Early and Middle Palaeolithic in Japan: an overview. *Bulletin of the Society for East Asian Archaeology*, Vol. 3, pp. 29-35.
- 2016b Recent advances of the Japanese Lower and Middle Paleolithic research. In: *Proceedings of the International Symposium on the Paleolithic of Vietnam in a regional context*. The Institute of Archaeology, Vietnam Academy of Social Sciences, Institute of Archaeology and People of Committee of Gia Lai Province, Department of Culture, Sports and Tourism, Vietnam, pp. 29-45.
- 諏訪 順
- 2006 「旧石器時代の最古を考える—『X層』研究の意義—」『岩宿時代はどこまで遡れるか—立川ローム層最下部の石器群—』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会, 2-12頁
- 鶴田憲昭 (編)
- 2010 『長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ』国土交通省中部地方整備局・長野県埋蔵文化財センター